小西重直教授の生涯と業績

片　岡　仁　志

1.

小西先生が京大教授に任ぜられ，谷本博士の跡を受けて第2代教育学担当教授として京都へ来られたのは大正2年8月である。時の総長は先生の恩師，二高時代の校長沢柳政太郎氏であったが，不幸にして大学自治擁護を標榜して勃発した京大事件のため，総長を辞任されたのは翌大正3年である。

先生は明治8年1月15日米沢に於て藩士富所家の長男に生れ，幼名を代吉といわれた。2才にして厳父を失い，母堂と別れ，親戚の家を転転として言語に絶する貧困と悲運逆境の中に成長された。11才の時，母堂の従兄に当る会津若松の小西家の養子となり，白虎隊で有名な会津日新館に入学された。22年，学期半ばに辛うじて参観生として安積中学校に入学を許され，其処で恩師岡田五蒐先生の崇高な人格に接して，将来教育者たらんとの志を立てられるに至った。また密かに私淑していた杉浦重剛，中村正直両氏の名前を一字ずつ無断拝借して重直と改名せられたという。27年同校を卒業，一時東京高師受験を試みられたが，藩の奨学資金の道もついて，無事第二高等学校（当時4年課程）に進み，33年東大哲学科に入学，34年卒業，同9月に3年間の独英留学を命ぜられ，35年2月出発，ライプチッヒ大学に於てフォルケルト教授に師事し，明治38年5月，日露戦争のさ中，米国を経由して無事帰朝された。同年6月広島高等師範学校教授に任ぜられ，同40年先生の教育学の処女作「学校教育」が出版された。広島在住満5年の後，43年7月文部省視学官に任ぜられ，44年「現今教育の研究」を上梓，大正元年9月第七高等学校長に転じ，鹿児島在住1年にして京都へ赴任せられた。時に先生は38才であった。私どもが京大に入学した大正13年は，先生の「教育思想の研究」が世に出た翌年である。当時の京大哲学科は，教授に西田幾多郎・朝永三十郎・松本文三郎・藤井健治郎・深田康算・波多野精一・米田庄太郎・高瀬武次郎・野上俊夫，助教授に田辺元・和辻哲郎・植田寿蔵・天野貞祐等の錚錚たる先生達が揃って，正に京大哲学科の全盛を誇っていた時代であった。この中にあって小西先生は最も円満な人格者として，また最も親しみ易い慈父として，学生敬慕の的であった。私どもも度度塔ノ段のお宅を訪問して，お話を承ることを楽しみにしていた。先生の生い立ちについても，米沢時代・会津時代・二高時代・東大時代・留学時代等断片的にではあるが，いろいろ承った懐しい思い出もあるが，これらは後年先生が自叙伝，感謝の生涯，その遺稿，教育思想の懺悔，教育思想を辿りて，私の生活と教育思想，等の中で詳しく記していられるのでここでは触れず，ただ先生の宗教面については，先生の教育観や世界観を理解する上にも参考になるように思い，二，三思い当ることを記すことにする。

先生の宗教的傾向は既に先生の幼少時代に胚胎する。それは宗教的信仰に厚った母堂の感化に外ならない。「感謝の生活」の最初に記されているように，悲運の中に悪戦苦闘された母堂が，遂に死を決意して，幼い先生を背負い，村端れの松川に入水しようとされ，一歩水中に入られた刹那，不思議な観音の霊力に引きもどされ，命拾いをされたという物語を早くから母堂に聞かされて育たれた。先生は自分の命を常にその時の余命と思っていられたようである。『この命拾いや，余命のことを追懐します時，感謝と言はうか，感激と言はうか，実に有難い感に打たれるのであります。私に若し少しでも宗教心がありますなら，それは母から聞いた此の物語によると思います』と述懐していられる。先生の二高時代は疾風怒濤の時代で，また永遠なものを求めて深い宗教的煩悶に陥られた時代でもあった。友人に奨められて，バイブル・クラスに通い，教虔な信仰と豊かな教養を持ったミス・ブゼルの人格に深く動かされ，熱心にその教を受けられ，先生自身も，高等学校時代に大いに自分の宗教心を磨くことが出来たと言っておられる。

大学入学後も宗教的煩悶は解決出来ず，初めの2年半は殆どその方面に没頭し，学問に対してはとかく無関心の事が多かったと言われる。先生が始めて上京される時，母堂は，東京にはきっと偉い仏教の坊さんがおられるに違いないから，是非そういう方にお目に懸って教を受けるようにと諭され，当時高僧の誉最も高かった雲照律師に参ずるようになったという。律師は地獄極楽の話や衆善奉行の戒律の話を子供に話すように嚙み砕いて話される。分り切った話と思うが，律師に接していると不思議に心が和ぐ。つまらない法話を聞きに行くことはもう止めようと思うが，何時しかまた律師に相見したくなる。また同じ話を聞かされて帰る。斯の如きことを幾度か繰り返えし，名状し難い崇高な律師の風格に接するようになって，漸く煩悶解決の曙光を見出すようになり，大学最後の半年余りは真剣に勉強された。卒業論文は「倫理上の自我」と題するもので，恩賜の銀時計を拝受されたことは言う迄もない。当時の先生は宗教的信念に立って，教育の実際家たらんことを志しておられたのであって，その概念的詮索には余り興味を持っていられなかった。従って，教育学と銘打った書物，特に当時流行のヘルバルト派ラインの物などには殆ど興味を感ぜず，教育の実際の興味にひかれて，ルソー，ペスタロッチー，フレーベル，ナトルプの物などを趣味的に愛読し，エミールには特に深い感銘を覚え，遂にその抄訳を試み，卒業後出版されて先生の処女作となった。留学の初め頃も先生の興味は宗教的なものや文芸的なもの，大哲学者，大詩人のものに向けられた。教育の学問的研究に身のはいらなかった先生に対し，フォルケルトは教育上の大人物の歴史的研究をまず試みるよう奨められたという。また先生はフォルケルトの美学，教育論の他，彼の批判的形而上学の思想，殊に彼のキリスト教的神観から深い影響を受けられた。

先生の宗教観にはかようなキリスト教や仏教の他になお儒教の深い影響の存することを見逃がすことは出来ない。先生は儒教的環境の中で生れ，その中で育ち，それを教えられて成長された。殊に会津日新館の儒教教育は少年時代の先生をして「士は志を尚ぶ」の教を地で実行(東京出奔)せしめんとした程の影響を与え，「天命を知らざれば以て君子となすなし」「誠は天の道なり，

これを誠にするは人の道なり」という天の思想や，至誠一貫の魂を早くから植えつけられ，敬愛の道を身に体して育たれた。儒教的なものが自ら中心となっていることは争われない。然し先生にとって大切なものは，必ずしも一宗一派の教義ではなく宗教一般に通ずる純なる宗教的体験である。神儒仏基のいずれでもないが，またいずれにも通ずる宗教一般ともいうべき宗教であった。これが晩年儒教の国，支那で完成された教外別伝の禅に最も親しみを感ぜられるようになった所以とも思われる。相国寺僧堂の山崎大耕老師や天竜寺管長関精拙老師，キリスト教の某牧師，其の他先生を加えて七人の宗教家の七星会と称する集りが出来て，月一回の清談を楽しまれるようになったのは，昭3・4年頃からと思う。またその頃から大耕老師の提唱を聞きに僧堂へ来られ，奥さんやお嬢さんも熱心に通われた。毎月一回必ず点心と称して二，三の雲水をお宅に招いて饗応され，京都在住期間ずっと続けられたのである。

2.

私ども在学当時，先生の普通講義は西洋教育思想史であった。ギリシャに始り，ルソー，ペスタロッチーを経て，ヘルバルトに及ぶものであり，特殊講義はシュプランガーのレーベンスフォルメンの講義であった。普通講義の中で最も印象に残っているのはルソーやペスタロッチーの部分である。「ペスタロッチー」の発音の仕方を教ったり，グローブのスタンツ孤児院に於けるペスタロッチーの絵をミュンヘンの絵葉書屋で発見し，これを日本に持帰った頃の事を非常な感激を以て話されたことを思い出す。その頃先生の普通講義の試験にはどんな問題が出てもエミールを書けば合格という伝説が信じられていた所をみると，講義はまだルソーに重きが置かれ，先生の本格的なペスタロッチー研究はこの頃から始ったと思う。「ペスタロッチーの宗教教育」という最初の論文が出たのが，大正13年であり，「全人としてのペスタロッチー」は昭和2年である。ここで少し先生の著作を通じ，この頃までの教育思想の変遷を辿ってみよう。

先生の処女作「学校教育」は帰朝後早早各地の講習会に於てなされた講演が機縁となって出来たものであるが，総論，教育理想論，養護論，教授論，訓育論の5部よりなる体系的教育学概論である。身心一元の立場に立って精神の優位とその支配力を強調し，教育は畢竟意志教育でなければならぬとして，努力主義，奮闘主義の教育論を展開していられる。教育実際論に於ても同じ主意主義の立場に立っ筋肉運動主義のライの実験教授学や，ハーレックの「中枢神経の教育」の影響が強く現われている。また，ホール，デューイ等の英米系の思想までがよく咀嚼包容されている。敍述も極めて平易明快，先生の教養のよく滲み出た名著として明治，大正を通じて十数版を重ね，当時の教育界に新鮮な影響をもたらし，之を原型とする先生の教育学教科書を通じて昭和前半まで，我が国正統教育学の典型とみられて来たのである。

続いて明治44年「現今教育の研究」を著わされたが，これは先生の視学官時代文部省主催の講習や，各地でなされた講演に基いて組織されたもので，根本に於て「学校教育に於ける思想」と異ることなく，ただそれを一層具体的実際的に述べたものである。ただ，本論全部が珍しく警世的な格調の高い文語調で書かれている所に先生の名文と視学官時代の覇気とが伺われる。

京大に来られてから約10年間の研究論文は主として大正12年出版の「教育思想の研究」の中に収められ，フィヒテ，ゲーテ，ジャンパウロ，ニイチェ，ジェステルウェッヒ等の教育思想の紹介，日本の近世教育史に関する諸論文や米国に於ける教育発達史の如き教育史的研究が主潮をなし「人格的教育学と教育の実際」「社会的教育学の過去及び将来」の如き当時流行の西洋教育思想に関するものも，史的興味が中心になっているように思われる。ただ，大正８・９年頃の「教育思想における自由の観念」「全体的個性と教育」「教育理想の研究態度」等が先生の根本思想にも触れる原理的な論文であった。大正９年８月先生は沢柳政太郎氏，長田新氏等と共に教育視察の為に独英米に出張を命ぜられ，大正10年６月帰朝され，第一次大戦後の各国の社会教育，道徳教育，最新の一般的教育事情を我が国に紹介された。

大正14年「意識と文化と教育」が発表されたが，この中には既に５年後に完成せられる筈の「教育の本質観」の骨子が論ぜられ，恰かもその縮図を見るが如く，またその出現を予告しているが如くである。これは明かに既にこの頃先生が教育の本質観完成の仕事に着手されていたことを示すものである。

先生が教育の本質について根本的究明を志されたのは，ドイツ留学中フォルケルトに師事した頃に始る。前節でも述べたように当時既に先生は宗教的体験に基く教育本質観の直観を持っていられた。教育実際家たらんとした当時の先生には，その学問的概念的認識は問題ではなかったが，たまたま留学によって教育学者たるの任務を課せられた先生にとっては，その学問的基礎付けが根本の問題でなければならぬ。先生が第一に思い立たれた研究課題は，児童の自発活動の根源を学的に究明しようとすることであった。然しこれは簡単に解決出来る問題ではなかった。そこでフォルケルトに相談されると，それは君の一生をかけても足りない大問題だ。それよりもまず一般的な活動についての研究を纒めることが先決問題ではないかといわれ，ひとまず，第二義に下って身心活動の科学的研究に専念して一応まとめることが出来た。この研究の副産物が「学校教育」であった。この書の教育理想論は前述の如く，身心一元論の立場を採ってはいるが，その両者の統一根源そのものには何ら触れる所なく僅かに三昧や無我の心理的説明を借りて精神や意志の優越性を論じたものであり，永遠界への繋りや，霊性の自覚は言外に匂うだけであって，全く表に現われていない。その上教育理念の学的演繹も欠けており，総じて教育本質についての哲学的基礎付けが充分でないといわねばならぬ。この事は先生も夙に自覚して序文に述べていられる通り，この完成を他日に期しておられたものである。京都に来られてからはこれが完成を使命と考えられるようになったのではないかと思う。

先生は自分の弱点は認識的研究の不足にある，何とかこれを補おうとしてその方面の学問を勉強してみた。当時の新カント学派やデルタイ学派，現象学派等の教育思想の研究に専念せられたのもこのためであったという。これらの研究によって，獲られたものも決して少なくないことは，先生の全著述を通じて伺われる所で，新カント学派の中でも批判的実在主義の立場に立つフォルケルトの哲学には終始強い関心をもっておられ，シュプランガーの文化的教育学の所説は最も先

生の興味に近いものであった。然し一般的に言って，これらの西洋教育思想には認識の形式や理論的組織方法等について，学ぶべき多くのものはあっても全く内容がない。恰かも論理の皮をかむようで，東洋人には到底興味を感ずることは出来ない。東洋思想では形式に捉われず，内容を以て哲理を説くが，西洋思想は内容を無視して形式だけで哲理を説こうとする。この両者を統合して独自の教育本質観を樹立したいというのが先生の構想であった。その最初の試みが実に前記の「意識と文化と教育」であったのである。この論文の末尾に「思想熟せず，意味尽さず，ただ純美の世界に対する憧憬のもがきを敍し，沢柳博士還暦記念号に寄稿するの光栄を得たるを悦ぶ」と記されているが，やがて思想が熟し，この短い論文が教育本質観となるまでには実に5年の歳月を要している。

教育の本質は人間の本性の根源から説明せられねばならない。人間本性の根源は永遠絶対の世界にまでこれを溯及せねばならない。永遠界は実に宗教の世界である。宗教こそ教育の根源であり，教育の過程であり，教育の目標であるとの確信を持っていられる先生にとっては，すべてが絶対界の認識の問題に帰一して来る。先生の「純美の世界に対する憧憬のもがき」とは，云う迄もなく，この絶対者の学的認識の問題であった。教育本質観の緒言に於て，『私は私の心の中に神を感ずる，私の周囲に神が顕現することをも見るのである。然し神について思惟をめぐらす時に，……神は私より逃げ去って失うのである。私の悩める心は何ものをも発見する事が出来ない」というルソーの言葉を引用され『教育の本質に関する私の気持にも亦実に之に類するものがある。』『私の認識的思惟力はこれを見破るにはあまりに微弱である。認識的思惟力は微弱であるが，本質を見破らうとする私の内面的衝迫は奔流の如くにして自ら抑へることが出来ない。そして教育本質の実態を認識的に論究してみようとすると，本質は私より逃げ去ってしまうのである，』と述べていられるように，この頃が先生の最も深刻に悩まれた時代であって，一時健康を害されたことがあったのも此頃ではなかろうかと思う。

人間の本性は結局意識の問題である。意識は統一なくしては成立たない。統一は意識の形式であると共に，他面必然的にこれには意識内容を伴わねばならない。ナトルプの先験的感情にも匹敵するものとして，先生は真実性という根源的内容をここに想定される。意識統一は真実性に他ならぬ，統一なくしては真実性に到達出来ず，真実性に徹するのでなくては意識統一には至らない。真実性と統一は同一不二のものである。また凡ゆる意識活動はこの根源的統一を根拠として分離綜合の二機能によって，拡大進展されねばならない。この意識の自己分離，自己綜合も単なる形式作用ではなくて，前者は敬と呼ばれ，後者は愛と名付けられるべき内容を持った充実的志向作用でなければならぬとして，ここに西洋思想の形式主義と東洋思想の内容的原理ともいうべき至誠真実，敬愛信の概念を統合して至誠の教育学，敬愛信の教育学を樹立しようとせられるのである。

また凡ゆる文化は意識にその根源を置かねばならぬ，認識，芸術，道徳，宗教，社会，政治，経済等一切の文化生活は，この敬愛信を含む意識の「真実性」的統一の自己実現であり，その種種相である。これらの文化的価値は真実性そのものとゐいうべき絶対真実性に由来する。意識の

統一には発達の程度や，その実現の種種相に於て個性的相違があるとしても，絶対真実性，意識の絶対的統一の極致には個性的差異はあり得ない。そこには唯，普遍的人間性というものがあるのみであり，それは客観的普遍者，絶対者である。それは真善美一如の絶対価値界であり，価値実現の当為の要求の生ずる根源であり，これを凡ゆる方面に渡って人格的に実現せんとする生気ある体験そのものが，教育の根本義ともいうべき陶冶でなければならぬと論じて居られるが，そこでは絶対者に関する表現は情緒的文学的で，理論的明晰さが欠けているように思われ，その考え方も意識の真実性的統一の極致というような連続的な極限概念で言い現わされ，極限への飛躍的直観や非連続の意味も未だ出ていない。従って霊性の概念も用いられていないし，文化と不可分な関係にある肉の問題や，労作に関する思想にも触れられていない。しかし昭和2年の「教育思想の懺悔」の中では前記論文の思想を敷衍して，教育はどこまでも宗教的永遠界を根底とせねばならないことを主張するものであるが，ここで注意すべきは，永遠界の把握には，真実に徹し自己のあるがままを投出す行為に依らねばならぬことを強調し，精神と肉体との相反対立を認めつつ，両者を止揚する行為的直観の考えが明かに出てくることである。先生は絶対弁証法的な，死して生きるという如き宗教的体験の表現は全く用いられないが，自己投出という言葉によって，「皮膚脱落して一真実のみあり」といった霊性的直観を追究しておられることは明らかである。

我我の精神も肉体もそれぞれ永遠界にその根源を有し，宇宙の万物は悉くその個性を発揮しつつ，永遠界にその根源を持っている。ただ人間のみはその根源を自覚する。教育は実に自我の世界と永遠界との関係を結合するものである。永遠界を自我の世界に体験せしめ，自我を永遠界の根源に帰さしむるものである。人間は少しずつでも発展を願ってやまないものである。そこを指導するのが教育の任務である。この任務を果す上には敬愛信の態度を持ったものを作ることが最少限度の教育の目標でなくてはならない。教育の実際活動に於ても自己を投げ出すという態度がなくては，教育は行われない。自己を投げ出すことの最も完全に行われる者ほど，教育を受ける立場に置かれた時は，教育可能性の大なるものであり，教育者としては最も大なる教育力を発揮するものである。

私はこの当時の先生の思想を追想しながら，私の生涯にとって忘れることの出来ない思出が蘇ってくるのである。それは昭和3年の4月，先生のお世話で，沖縄女子師範学校教諭として御推薦を受けた時の事である。当時大学院で研究中であった私は教師となることは学問片手のアルバイトぐらいにしか考えていなかった。先生から呼出しを受けて部長室で池上校長に紹介され，同校長から極めて鄭重な来任懇請を受けたのである。全く突然な出来事に驚いたが，謝意を表し暫く御猶予を願って退出した。その夜校長を旅館に訪ね，とても長く沖縄のお世話になれそうにも思えませんが2・3年位でも差支えありませんかと相談してみると，それで結構です，是非快諾を得て帰りたいと思う，ということであった。翌朝，小西先生のお宅に伺って昨夜校長にお目にかかって御相談しました所，2・3年位でも差支えないということですから参ることに致します，と言い終るか終らぬ間に，平常の温厚な先生とは打って変って，君はそんなことを校長に言った

のか！私はもう君を推薦出来ません！と語気鋭く威を振っての一喝であった。先生は更に声を呵して，何故沖縄の土になる決心で行けないのか！教育はその土地の土になる決心がつかなくては出来るものではない！というお言葉で，思わず頭を垂れて考え込まざるを得なかった。まことにわれ過てり，という悔恨の情，慚愧の念に襲われた。教育がかくも厳粛な命がけの大業であると言うことをこの時始めて骨髄に徹して思い知らされたのである。先生はその儘一言も言われない。私も全く返答に窮した。罪なくして配所の月を観るの感もしないではなかったが，教育の大道の前にはもはやそんなことは問題ではなくなった。学問は何処ででも出来る，こういう恵まれない弧島の教育に生涯を捧げてみるのも面白いという気分が湧き起って来た。万一，この島に骨を埋め得ないような邪念を生じた時は，一切の教職から身を引く時だと漸く決心がついて，誠に慚愧に堪えません，沖縄の土になるつもりで参りますと申上げると，そうか，その決心がついたか，よかった，よかったと先生は手を握らんばかりに喜ばれた。先生の慈眼にもきらりと光る露のようなものが見えたが，私も感激の涙を抑えることが出来なかった。先生の夏洋服2着を頂いて帰る途すがら，清風千古に在り，といった感懐が自ら湧き起って来たのであった。翌朝洋服屋が来て小西先生からの御注文で，寸法を採りに参りましたということでまた驚かされた。出発までに立派な洋服が整い，生地も柄も皆先生の御配慮であった。赴任後間もなく奏任官待遇の発令を受けたが，これも既に赴任前先生と校長の間で話が決っていたものらしいのである。小西先生のわれわれ弟子に対する御親切は総べてこのような仕方であったと思う。教育はその土地の土になるのでなくては出来るものではないと言う先生の一言は，私の終生片時も忘れることのない言葉となった。官命によって幾度か学校は変らされたが，いつも私にとってはその学校が唯一の死場所であった。今日教育界の一隅に身を寄せ得るのも，この時の先生の自己投出，捨て身の教訓の賜に他ならないと思っている。

先生の宗教観は，次第に精練を加えて，意識から霊性へと，いわば絶対矛盾の自己同一とも称すべき霊性的直覚の世界に進展していったように思う。精神は精神として永遠界に根ざし，肉体は肉体として永遠界に関係を有する。両者は永遠界と交渉するがために互に相関連し交渉し得るのである。意識の絶対的統一は霊性的直覚の働きとして霊性と呼ばれることになる。神によって作られた人間の肉は霊と交渉し純化さるべき使命を与えられたものであり，絶対者によって与えられた人間の霊は空中に浮遊する霊魂ではない。実に肉を純化し，価値化すべき使命を課せられたものである。両者は対立の意味を持ち乍ら，伴に融合親和する兄弟姉妹の関係にある。肉は霊によって価値化され，価値化された肉はまた霊を養い活力を供給し，両者相まって人生を構成する。霊と肉との交渉があって始めてわれわれの生活は，動物にもあらず，神にもあらざる人間の生活，人間のみの持つ文化の生活となるのであり，人間の人格は文化的人格であらねばならない。

霊性はわれわれの有限生活と永遠界とを結び付けるいわば臍の緒である。この臍の緒によって人間は永遠界の母胎より滋養を摂取し，自覚的に母胎そのものに帰依安住すると共に，意識的自覚的に霊の作用によって，永遠者の精神を個性的に実現するのであるが，この実現は必ず肉を媒

介として行われなければならない。かような霊の支配の下に筋肉を通して起る創造的活動は労作と呼ばれ，この労作を通して，人格の尊厳も，凡ゆる文化的価値の実現もわれわれに可能となるのであり，労作は霊と肉を一元的に結びつける所の教育原理となるのである。

かような宗教的絶対観に立って教育の本質を，この原理から体験的に論究してみようとされたのが「教育の本質観」ならびに「労作教育」の2著である。もとよりその中には，先生の永年に亘る広汎な教育思想研究の成果が網羅され，卑近な教育実際面との関連も顧慮され，未分，対立，綜合の3段の体系を保ちつつ青年の如き熱情と迫力を傾けて論述されたもので，実に先生の全思想の結晶である。われわれはこの両著に於て始めて小西教育学の完成を見るのであり，先生におかれても半生の課題に解決を与え籠頭を脱却して角駄を卸すの思いがあられたことと思う。

3.

先生は，昭和8年3月学内の衆望を担って京大総長に就任せられたが不幸にして滝川事件が勃発し，先生は凡ゆる叡智と至誠の限りを尽してこの解決に当られたが，遂に成らず病の故を以って同年6月辞任せられたのである。其後，暫く故山に病を養われたが，その時，自叙伝「感謝の生涯」の執筆を思い立たれたと言われる。2・3年後には，東京都世田ケ谷区成城町に居を移され，専ら講演，著述に専念せられるようになった。先生の至誠真実の教育精神はますます広さと深さとを加え，崇高な光を添えて，活達自在の発展を遂げて行った。母のために，教師のために，また時局対処のために天地の誠を宣揚し，親心，子心の教育愛を傾けられた。広瀬淡窓，細井平州に関する著述は大東亜戦争熾烈を極めたさ中になされたものである。

青年の如き水水しさと，東洋的な聖者の風貌とが，先生に於ては何の矛盾も屈託もなく一如に融合して，或いは高高たる霊峯を仰ぐが如く，或いは百花の園に遊ぶが如き思いあらしめた。食糧の難に臨んでは晴耕雨読を楽しみ，敗戦の虚脱を見ては，いち早く「民主教育の本質」と「新日本建設とペスタロッチー」の2著を世に示された。続いて「感謝の生涯」一本を拝受して，先生の霊寿無窮を信ぜんとした者にとって，突如訃報の伝えられた昭和23年7月21日は万象為めに鳴りを静め，天地亦千古の寂滅に帰ったような感を与えた日であった。直指院徳翁重厚大居士（世寿74）の法号は直に相国寺管長山崎大耕老師によって奉呈され，大光明寺本堂に安置された霊位の前に，私は老師と伴に観音経一巻を捧誦して遙かに先生の御冥福を祈るより外なかった。

春風秋雨十年の歳月が過ぎ，教え子達の手によって営まれた相国寺畔の先生の墓前もようやく苔なめらかならんとする時，不肖の子の歎きは日と共に深まり行くを禁じ得ないのである。

小西重直教授著作目録

単行本

明治35年	ジャン・ジャック・ルソー先生	
〃 41年	学校教育	博文館
〃 44年	現今教育の研究	同文館
大正12年	教育思想の研究	広文堂
〃 13年	現代欧米教育大観	同文館（長田新氏と共著）

〃 13年	精神生活の振作	大阪市役所教育部
昭和 5年	教育の本質観	玉川学園出版部
〃 5年	労作教育	玉川学園出版部
〃 7年	塾生と語る	玉川学園教育文庫
〃 7年	教育原理と自由	玉川学園教育文庫
〃 7年	教育理想の内容	玉川学園教育文庫
〃 8年	思想千秋	永沢金港堂
〃 10年	小西博士全集（全5巻）	玉川学園出版部
〃 11年	教育精神の研究	明治図書株式会社
〃 12年	母のための教育講話	第一出版社
〃 13年	小西重直教育読本	第一書房
〃 13年	国民の教養に関する根本思想	金港堂
〃 14年	時局と教育の本義	玉川学園出版部
〃 16年	国民教育と親心	玉川学園出版部
〃 17年	国民教育の基本的研究	金港堂
〃 18年	広瀬淡窓	文教書院
〃 19年	鷹山公と平州先生	同文社
〃 19年	嚶鳴館遺草（校訂）	宮越太陽堂
〃 22年	民主教育の本質	金港堂
〃 23年	新日本建設とペスタロッチー	西荻書店
〃 23年	感謝の生涯	金港堂　絶筆「感謝の生活」（行路七十年続）

論文および講演

明治39年 4月	品性の二大要素について	国学院雑誌
大正11年11月	現代の欧米教育	文化書房
〃 13年 5月	選挙と教育	大阪朝日
昭和 2年 1月	全人としてのペスタロッチー	全人
〃 3年 1月	教育改造と労作	学習研究
〃 3年	思想問題と教育	小学校
〃 3年 2月	教育と真理の熱愛者としての沢柳博士	教育研究
〃 4月11月	世界教育史上に於ける玉川学園の地位	玉川学園日誌
〃 10年 5月	私の生活と教育思想　講演	宮崎県教育会
〃 10月 6月	修身科と家庭及社会	学校教育
〃 11年 2月	敬愛信の教育と淡窓先生	訓育
〃 11年 4月	教育者と宗教家の一致	訓育
〃 11年 4月	実践教育としての日本教育	文教書院
〃 11年 5月	平州と鷹山	名古屋新聞
〃 11年 6月	宗教的生活と教育的生活	訓育
〃 11年 8月	教育と自然，自由と干渉	訓育
〃 11年11月	母性と教育	訓育
〃 11年11月	人間性の本質と淡窓先生	日用
〃 11年11月	教育の本質と歴史教育	歴史教育
〃 12年 1月	教育と児童性	訓育
〃 13年 2月	天地の大道と親心，子心	教学叢書

〃	13年 3月	この春卒業する皆さんへ	放送
〃	13年 4月	時局と教育内容の刷新	教育研究
〃	13年 4月	躍進日本と青少年の体育	学校教育
〃	13年 4月	時局と新学年	教材王国
〃	14年 1月	長期建設と教育の重点	教育研究
〃	14年 1月	国民精神の根本的培養	教育研究
〃	14年 1月	時局と人間愛	訓育
〃	14年 1月	日本的社会と教育者の信念	生命の教育
〃	14年3月	はたらくことの教養	文芸春秋
〃	14年 8月	師道と親心	訓育聯盟
〃	14年11月	教育の本質と日本精神	三重教育
〃	14年	科学の勇者新城博士の風貌	文芸春秋
〃	14年5月	日本旅館における待遇の簡易化	文芸春秋
〃	15年 1月	国民学校と国民教育の基本精神の錬成	教育研究
〃	15年 1月	日本道徳の特質	放送
〃	15年 8月	師道について	訓育聯盟
〃	16年 3月	国民教育と日本的教育愛	三重教育
〃	16年 4月	母ごころ	訓育
〃	16年 5月	母心の有難さ	訓育
〃	17年 1月	日本的教育愛	全人
〃	17年 2月	沢柳先生の生涯について	全人
〃	17年 3月	教育人の気字	全人
〃	17年 6月	大学設立を祝して	全人
〃	17年10月	師道の昂揚	国民教育
〃	17年～18年	学生に与う	全人
〃	18年 6月	新大学論	大阪毎日
〃	18年 7月	創造力としての敬虔心	全人
〃	18年10月	敬虔の精神	
〃	18年12月	学徒の真剣味	全人
〃	19年 7月	広瀬淡窓を繰返す	教育論叢
〃	21年10月	米国の国民教育とペスタロッチー	民主教育
〃	22年 1月	新教育とペスタロッチー	教育社会
〃	22年 5月	もと肥の研究	渾沌
〃	23年 2月	新日本の建設とペスタロッチー	大阪講演
		小西博士放談録（1～8）教育新聞	
		咸宜園	岩波新教育学辞典
		広瀬淡窓	岩波新教育学辞典

〔註〕本著作目録は近藤寿太表氏（三重県員弁郡東員中学校教諭）の資料をもとにして取捨したものである。